

彙 報

会長 国 広 哲 弥

昭和 60 年度第 2 回常任委員会

日 時：9 月 10 日（火）18 時～21 時 30 分

場 所：三省堂内 言語学会事務局

出席者：国広哲弥（会長）、梅田博之、菊地康人、柴谷方良、長嶋善郎（以上、常任委員）、小泉 保（編集委員長）、上野善道（事務局長）、服部四郎（顧問）

- (1) 第 91 回大会について（研究発表者の選定、プログラムの決定）
- (2) 『言語研究』の体裁変更の件
- (3) 『言語研究』のバックナンバーの取り扱いの件
- (4) 『言語研究』第 88 号からの残部取り扱いの件
- (5) 寄贈図書取り扱いに関する件
- (6) 学会事務センターへの事務委託についての中間報告
- (7) 昭和 61 年度春季大会開催校

昭和 60 年度第 2 回委員会

日 時：10 月 12 日（土）10 時～13 時 30 分

場 所：金沢大学総合図書館

出席者：国広哲弥（会長）、井出祥子、井上和子、上野善道（事務局長）、大東百合子、寛 壽雄、小泉 保、近藤達夫、崎山 理、佐藤昭裕、庄垣内正弘、竹内和夫、田村すず子、拓植洋一、奈良 毅、西田龍雄、樋口康一、蛭沼寿雄、堀井令以知、前田富祺、藪 司郎（以上 21 名）

委任状：38 名

オブザーバー：松本克己（会計監査委員）、柏木英彦（大会運営委員長）、菊地康人（常任委員）

故前島儀一郎氏（評議員）の冥福を祈って黙禱する。

議事ならびに報告

- （1）『言語研究』誌の体裁の変更について、小泉保編集委員長よりはかり、次のように決定した。
 - ・邦文目次をおもて表紙に印刷する。（これに伴い、表紙裏の印刷内容も入れ替えることになった。）
 - ・号数表示を従来の漢数字からアラビア数字にする。
 - ・おもて表紙と背に発行年月を入れる。
 - ・裏表紙の英文目次の年号に月名を加える。
 - ・表紙を「ちり付き」から「切り付け」に変更する（はみ出しを切り落とす）。
- （2）『言語研究』バックナンバーの取り扱いについて。第87号までのバックナンバーの販売、および第88号以降の会員外への頒布を三省堂書店に委託することが提案され、承認された。なお、学会の永久保存分として各号5部を事務局に保管することになった。
- （3）学会への寄贈図書をA.A研図書室に移管する際の事務手続きについて報告があり、了承された。
- （4）昭和61年度春季大会は6月14日・15日に筑波大学で開かれることに決まった。運営委員長は松本克己氏。
- （5）九学会連合に関する件。昭和61年度は日本言語学会が当番学会となる。その幹事理事2名の人選については会長に一任された。（委員会のあと、佐藤亮一、井上史雄の両氏に決定。）昭和61年度から3年連続のテーマは「地方文化の均質化」。日本言語学会選出の野元菊雄理事より、理事会出席その他の報告が書面にてあった。
- （6）『言語研究』発送停止の件。従来の規定、
 - a) 11月末日現在で、その年度の会費を納めていない会員は『言語研究』の発送が停止される。
 - b) 11月末日現在で、前年度の会費を納めていない会員は退会した

ものとみなす。

の「11月末日現在で」を、a) b) ともに

「その年度の第1号が発行されるまでに」

と変更することが、事務局から提案され、承認された。

- (7) 国際言語学会議の運営委員会への出席報告が井上和子氏からなされた。1987年に東ベルリンで開かれる第14回の会議の中心テーマは「Humboldt から現代言語学へ」と決まった。

第91回大会

期 日 昭和60年10月12日(土)・13日(日)

会 場 金沢大学 文・法・経済学部校舎

第1日 (10月12日)

開会の辞 14時30分より(40番教室)

公開講演 言語学と実験

浅 井 亨

Supersentential Semantics

Th. R. Hofmann

会員懇親会 18時より(石川県職員会館にて)

第2日 (10月13日)

研究発表 10時30分～12時00分

・A会場(30番教室)

(A1) 非能動者主語構文と“Amphidiathesis”

——受動・再帰・使役・完了の統語位相論

田 原 薫

(A2) 語順の変わる原理——ニューギニアの

オーストロネシア語の場合——

崎 山 理

・B会場(20番教室)

(B1) 定・不定表現と記憶階層モデル

風 斗 博 之

(B2) 日本語の指示表現

吉 本 啓

(B3) 日本語の格助詞省略について

平河内 健 治

会員総会 13時00分～13時20分 (30番教室)

研究発表 13時30分～16時15分

・ A会場 (30番教室)

(A 3) 満洲語文語の internal-head relative clause について

久 保 智 之

(A 4) 朝鮮語アクセントの比較研究試論

福 井 玲

(A 5) 無声音産生の喉頭制御機構について

吉 岡 博 英

(A 6) 幼児音の誤りとその言語学的示唆

伊 藤 克 敏

(A 7) 日本語オノマトペの表現力——英語との対比において——

寛 壽 雄

・ B会場 (20番教室)

(B 4) 日本語に於ける擬似他動詞 (deceptive intransitive)

と格標識

有 働 真理子

(B 5) 構成素構造と主題構造

小 野 尚 之

(B 6) 根 (root) 文の自己修飾

高 橋 孝 二

(B 7) 英語の照応と副詞節：統語論的分析の問題点と

意味論的解決

高 見 健 一

(B 8) \bar{X} 規約と日英語助動詞の階層性

澤 田 治 美

閉会の辞

◇ 物故会員

菊沢 季生（昭和60年8月28日逝去）

木村 彰一（評議員）（昭和61年1月18日逝去）

故 木村彰一氏

木村先生、先生の死はあまりに突然でした。つい先日、七草の日に私たちは先生とお酒を汲み交して、新らしい春を祝ったばかりでした。その日の先生はいつもまして朗らかで、つぎつぎに楽しい話題をもち出され、レトリックの粋をつくされた感がありました。「年をとればとるほど新らしい話題を求めなければならぬのですよ」と先生は笑っておっしゃいました。その先生が、忽然として永遠の沈黙の世界に消えていってしまわれたのですから、残された私たちの淋しさは言いようもありません。

ふり返ってみますと、先生が北海道大学から東大にお移りになり、先生が卒業された言語学科の教官として、スラヴ語学とラテン語をお教えになったのは、ちょうど30年前のことでした。そのご講義が始まるひと月ぐらい前でしょうか、

本郷で先生との初めての出会いがありました。私たち学生は亡くなられた高津先生の後について、おずおずとバーに入っていました。先生がどんな方か、全然知らなかった私たちは、どのようなことになるのかわからないままに、黙りがちでした。ところがお酒が入るや否や、雰囲気は一変し、先生のペースに皆巻きこまれてしまいました。そして先生のオーバーがだるまストーブで焼けこげるのも気付かぬほど、先生も私たちも話しに熱中してしまったのです。この記念すべき日から、先日の最後におめにかかった日まで、30年もの間、先生はたくまざるユーモアを交えたそのお話しによって、私たちに学問の楽しみを教えてくださいました。教室よりも先生との直接の対話、そして先生のおおらかな人格にふれることを、私たちはいつも楽しみにしていました。そして、先生との対話を通して、私たちは自らの生き方を反省してきました。その意味で先生は、私たちの学問の師であると同時に、人生の師でもありました。一度先生に親しく接した学生は、いつまでもその魅力にとりつかれるという、不思議な力を先生はおもちでした。それは学問よりもっと大きな力でした。

先生はギリシア、ラテン語の研究から出発されたとうかがっています。この西欧の古典文献学は、いわばすべての学問の親であり、言語研究の原点でもあります。そしてこの伝統のある学問の精神が、先生のバック・ボーンになって、その上に先生はスラヴ学の研究を重ねていかれました。先生は語学の天才でした。さすがの高津先生もうらやむほど、新しい言語を苦もなくマスターされました。その豊かな語学力を駆使して東西の文学を読破され、それが一つになって先生の世界を形成していました。またその広い智識が、たった一つの語彙の訳にも、もっとも適切な日本語を選ぼうと苦心される繊細な先生の語感を、いやが上にも鋭く磨き上げていったのではないかと思います。早稲田大学を退職されてからは、再びふり出しにもどって、古典学の研究に情熱を燃やされ、ラテン語の辞書作りにとり組んでおられました。仕事の進め方、語彙の選択、訳語のことなど、実に細かな計画を立てられて、理想の辞書を実現しようと意気込んでおられました。この辞書がやっと第一歩をふみ出したところで先生はお亡くなりになってしまったのですから、本当に残念で仕方がありません。

先生は森鷗外を愛読されておられました。「鷗外のすべてがよい」とおっしゃって

いました。高津先生は夏目漱石のファンでした。生前お二人が、漱石が海外かで議論されているのを、私はいく度かうかがったことがあります。今ごろはどこかで両先生が久しぶりに再会して、また同じ議論をたたかわせておられるのではないのでしょうか。

木村先生、先生はお亡くなりになりましたが、先生の心は私たちの中に生きています。どうか安らかにお眠り下さい。

昭和 61 年 1 月 21 日

風間喜代三
(赤堤教会にて)

永年にわたり評議員などを務められた本学会会員、東京大学名誉教授木村彰一先生は、昭和 61 (1986) 年 1 月 18 日、先生が愛されて止まなかったラテン語の辞書の構想を練っておられる最中に倒れられ、その後間もなく忽然としてこの世を去られた。享年 71 歳である。

先生は大正 4 (1915) 年、1 月 5 日秋田県にお生まれになり、成蹊高等学校を経て東京帝国大学文学部言語学科を昭和 12 (1937) 年にご卒業、その数年後より東京外事専門学校、北海道帝国大学法文学部、北海道大学文学部、東京大学文学部 (言語学)、東京大学教養学部、東京大学文学部 (ロシア語学・ロシア文学)、早稲田大学文学部で教鞭をとられた。昨年ご退職になり、やっとこれからご自分のお好きな研究にいそしまれようとなされた矢先の訃報であった。

先生が残された業績を拝見すると、先生ご自身がそうであったように、実によくバランスがとれたヒューマニストの面影が浮んでくるが、言語そのものの研究を基礎に、言語作品を追求なさるといふ文献学の忠実な徒であったことが彷彿と浮かび上がってくる。ご研究の範囲は、ロシア語・ロシア文学を中心にスラブ語・スラブ文学から西洋古典語・古典文学にも及び、日本における実質上のスラブ学の創始者で、その頂点に立って学界をリードしておられ、この分野での基礎作りに文字通り専心しておられたのである。先生の学風の特徴の一つは後から来る人たちの手助けになるような業績を残そうとされる、よい意味での実用性で、今日の日本でスラブ学を学ぼうとすれば、どうしても先生が残されたいくつもの作品のお世話にならないわけにはいかない。

そのいくつかをここに挙げると、八杉貞利先生との共著の『ロシヤ文法』（岩波書店、1953）は依然として本邦唯一の学術的ロシア文法であり、また『ロシア文法の基礎（改訂版）』（白水社、1974）は日本の代表的学習書の一つとなっている。そして、いやしくもロシア語を学ぶ者で、先生を中心に編纂された『博友社ロシア語辞典』（博友社、1975）のお世話にならない者はいないであろう。

この方針はポーランド語の場合にも踏襲され、吉上正三氏との共著の『ポーランド語の入門』（白水社、1973）、先生の指導下にできた『白水社 ポーランド語辞典』（白水社、1981）と、これまたポーランド語を学ぶ者がどうしても避けて通れない基礎を準備なされているのである。

しかし、先生のご活躍は、ご自分の言語研究に教育的配慮を伴わせた実用性の高い教科書、辞書の範囲にとどまったのではない。永年にわたるご研鑽をもとにした、ロシア古典文学の訳業『イーゴリ遠征物語』（岩波書店、1983）は文献学的研究と文学的資質とが結びついた文字通り珠玉のような一篇であり、亡くなる一年前に出版された『古代教会スラブ語入門』（白水社、1985）は先生の言語学、古典学、スラブ学が見事に結晶し、それが賛嘆おくあたわざる教育的配慮により整理されているという文字通りの名作である。

このようにして見てくると、先生のご逝去があまりにも早すぎたと感じるの一人私だけではないと思われる。ここでは先生がなされた莫大な量の翻訳や、いくつもの学部、学科の開設という行政面での輝かしい、しかも重要な意味を持つご業績について触れる余裕がないが、この面での先生のご足跡もまた非常に大きなものがあるのである。

先生の突然の逝去により、ご家族、ご親戚の悲しみの他に、日本の言語学界は貴重な一人の印欧語学者を失うことになり、スラブ学界は文字通りの大黒柱を失い、われわれ弟子は敬愛して止まなかった師を失うこととなったのである。

先生は没後、鳥のことばを解したといわれる「アシジの聖フランシスコ」の名を得られ、1986年2月12日には正四位勲三等旭日中綬章をさづけられた。

千野 栄一

◇ 受贈図書リスト (昭和60年8月1日～12月31日)

- 外国文学研究 66, 67, 68 (立命館大学外国語科連絡協議会 1985)
 カナノヒカリ ダイ 757—758 ゴウ, ダイ 760—761 ゴウ
 (カナモジカイ 1985)
- 計量国語学 15 卷 2号, 3号 (計量国語学会 1985)
- 研究報告集 6 (国立国語研究所 1985)
- 研究論集 No. 42 (関西外国語大学, 関西外国語短期大学 1985)
- 言語学論叢 1985 年第 4 号 (筑波大学 一般・応用言語学研究室 1985)
- 八木橋正雄篇「現代ギリシャ語キプロス方言の研究」(八木橋氏私家版 1985)
- 考古学雑誌 第 71 卷第 1 号 (日本考古学会 1985)
- 国立民族学博物館国内資料調査委員 調査報告集 6
 (国立民族学博物館 1985)
- 宗教研究 第 59 卷第 2 輯, 第 3 輯 (日本宗教学会 1985)
- 人類学雑誌 第 93 卷第 3 号, 第 4 号 (日本人類学会 1985)
- 朝鮮学報 第百十六輯 (朝鮮学会 1985)
- 東京外国語大学論集 35 (東京外国語大学 1985)
- 東方学 第七十輯 (東方学会 1985)
- 日本学術会議月報 第 26 卷第 7—12 号 (日本学術会議広報委員会 1985)
- 日本常民文化紀要 第十一輯 (成城大学大学院文学研究科 1985)
- 方言談話資料集 (8) (国立国語研究所 1985)
- 民族語文 1985 年 4—5 (中国社会科学出版社 1985)
- みんぱく 1985 年 8—12 月号 (国立民族学博物館 1985)
- 山口大学独仏文学 第 7 号 (山口大学独仏文学研究会 1985)
- 論集 第 36 号 (神戸大学教養部 1985)
- ACTA ASLATICA 49 (東方学会 1985)
- Annual Newsletter of the Scandinavian Institute of Asian Studies,*
 No 18 (The Scandinavian Institute of Asian Studies 1985)
- Linguistique et Littérature, Vol. XXVII—No. 4*

(Académie Bulgare Des Sciences 1985)

Litteratura 6 (名古屋工業大学外国語教室 1985)

NAŠE ŘEČ 1, 1985

(Academia nakladatelstvi Československe akademie věd 1985)

SLOVO A SLOVESNOST 2—3, XLVI—1985 (ČESKOSLOVENSKA
AKADEMIE ORIENTAL INSTITUTE ČSAV 1985)

Harvey Pitkin, *Wintu Grammar*

(University of California Publications 1984)

ВЕСТНИК ЛЕНИНГРАДСКОГО УНИВЕРСИТЕТА No. 16, No. 23

(Ленинград 1985)

СЕРИЯ ЛИТЕРАТУРЫ И ЯЗЫКА, ТОМ 44, No. 4

(Академия Наук СССР 1985)

Русская Литература 3, 1985 (Академия Наук СССР 1985)

Русский Язык в Школе 3—5, 1985 (Москва 1985)

Українська Мова і Література в Школі 5—9, 1985

(Київ Радянська Школа 1985)

◇ お知らせ

通訳電話の展望と問題点に関する国際シンポジウム

テーマ 「通訳電話」——技術的・社会的展望と問題点

日時 昭和61年4月12日(土)10時～17時30分

会場 読売ホール(東京都千代田区有楽町1-11-1 Tel. 03-231-0551)

講演者・演題

総合講演

- 1) 藤崎博也(東京大学): 通訳電話——言語障壁の克服のために——
- 2) L. Rabiner (AT & T Bell Labs.): 音声処理の立場から
- 3) 長尾 真(京都大学): 自然言語処理の立場から
- 4) P. Cohen (CSLI, Stanford University): 談話モデルの立場から
- 5) 岩男寿美子(慶応義塾大学): 国際コミュニケーションの立場から

引き続き、関連分野の代表的な研究者による討論会を行います。

連絡先 通訳電話国際シンポジウム事務局
 (〒107 東京都港区赤坂 1-8-10 第9興和ビル)
 (株)サイマル・インターナショナル気付 Tel. 03-586-8691)

第92回大会宿泊案内

昭和61年6月14日(土)・15日(日), 筑波大学

付近の主なホテルとしては次のようなものがあります。御利用の方は各自で直接お申し込み下さい。

ホテル名	会場までの距離	シングル部屋数
トレumont・ホテル 0298-52-1683 茨城県新治郡桜村天久保 3-19-9	5分(徒歩)	約20室 (¥5,000より)
筑波研修センター 0298-51-5152 同 桜村天久保 1-13-5	15分(バス)	180室 (¥2,800)
筑波第一ホテル 0298-52-1112 同 桜村吾妻1丁目	15分(バス)	約30室 (¥8,630より)
ホテル・サンルート 0298-52-1151 同 桜村花室 1145	25分(バス)	約20室 (¥6,500より)
土浦第一ホテル 0298-22-4111 土浦市港町 1-8-26	50分(バス)	66室 (¥6,200より)
ホテルグランド東雲 02975-5-2211 茨城県筑波郡谷田部町小野崎涌井 488-1	25分(バス)	46室 (¥4,400)
ニューたかはし竹園店 0298-51-1208 茨城県新治郡桜村竹園 2-10-3	20分(バス)	23室 (¥4,500)

その他、土浦市内にはいくつかのホテル、ビジネスホテルなどがあります。

◇ 本誌は文部省昭和60年度科学研究費補助金の交付を得て刊行されたものである。